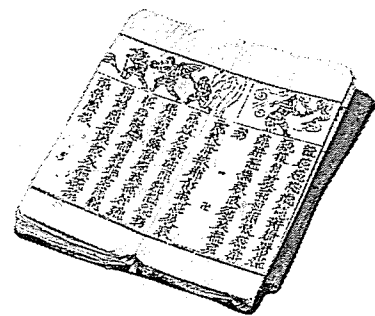


『法華経』のグローバルな意義

デーヴィッド・W・チャペル
石神 豊 訳



イラスト・西夏語「法華経」

はじめに

西暦二〇〇〇年の到来は、新世紀とともに新しい千年という時を刻むことになる。これまで大乘仏教の内部では、それぞれの時代は、法華経への新しい論点や関心をもたらしてきたし、先立つ時代には見られなかった新鮮な意義をしばしば見いだしてきた。今日では『法華経』は、ただ日蓮仏教にのみならず、また大乘仏教にさえ属するものでなく、むしろ世界に属するものだといつてよい。一八五二年に、サンスクリット語の『法華経』がフ

ランス語訳され西洋に紹介されたが、一八八四年以降『法華経』は「東洋の聖典」の一つといわれるようになり、オックスフォードから英訳で出版された⁽²⁾。そして仏教帰依者を得たのみならず、ほぼ一世紀かれこれ、キリスト教の学者からも注意をひきつけてきている⁽³⁾。さらに、ここ二十五年の間に、漢訳『法華経』は少なくとも五つの新しい英訳をみるにいたった⁽⁴⁾。そこで今日、われわれはただ仏教にとつてだけでなく、人類にとつての、その役割について問うことができるわけである。よって、本稿では、数ある聖典の中でもとりわけ『法華経』の意義に

ついて考え、さらに二十一世紀がかかえる緊要なくつかの難題に対して、『法華経』がいかなる役割を果たしているかについて考えてみたい。

一、宗教的多元主義という挑戦

世界的な聖典として、『法華経』が究極的なものであるという主張は、他の仏教経典や、仏教でない聖典によつてなされる相似た主張、たとえばイスラム教徒が聖なるコーランに対してなす主張と、同列に置かれなければならない。イスラム教徒と法華信徒にとつて、おののの聖典は同じく不朽の教えを示すものとみられ、全人類を救う真理をあらわしているとみられるのである。

過去において、こうした事情は、どちらが正しいかについて互いの挑戦と競争を引き起こしてきた。しかし、何世紀もの不毛で消耗な宗教戦争の後に、人類が学んだこと、それは、もつとも重要な問題は、どの宗教が他より優れているかということではなく、どの宗教がこうした宗教的な多様性を説明し、われわれに理解させる方法をもっているか、そして世界の諸宗教のなかに平和と調和

をもたらす仕方をもっているかどうか、ということである。どの聖典が最高であり、もつとも真実であるかについでに宗教同士の競争に巻き込まれるよりも、われわれはまず、『法華経』がどのように他の聖典と関連しあうことができ、そしてわれわれの宗教的生き方の多様性をどのように説明できるかを考える必要がある。

幸いにも、法華経は他の教説の存在に多大な注意を払つており、それらの重要さも肯定している。しかしながら、この肯定は部分的なものである。というのは、それらはすべて巧みな手段 (upaya) 「方便」という烙印を押されているからである。これに対して、法華経の教えは完全で究極な教え (saddharma 「妙法」とみられる。つまり他の教えは、ある時ある場所における個人の特殊な要求や才能に役立つかもしれないが、すべてそれらは不完全であり、法華経という真実かつ究極の教えへと吸収される、というわけである。

この立場は、法華経が排他的なものでなく、他の教説にも積極的な価値を認めるということを意味している。しかしながら、これは、他の教説にむやみに寛容である

ということではなく、他の教説がより低い発展段階にある人々の助けとなるという意味で、その積極的な寄与を評価しているのである。他方、それらの教説は限界をもち、最高の段階へ到達することは不可能だと裁断している。ここから『法華経』は、すべての教えが互いに捕うものである―それらは異なるものでなく、同じゴールへと向かう等しい道である―ということを拒否する。法華経は、他宗教を、より低いレベルでは役に立つものとして認めるという、他宗教への発展的アプローチを表明しているが、最終的には、最高の真理に到達するには不適當なものとして、この「三乗」(三つの乗り物)を退ける。この最高の真理は、法華経の教えという「一乗」

(唯一の乗り物) によってのみ到達されうるのである。

多元主義に対するこの法華経の立場は、トマス・アクィナスの教説にもとづいたローマ・カトリックの態度と同調するものがあるように思われる。アクィナスは、ギリシャ哲学という明らかに価値あるものに直面し、ここから理性と啓示の区別を展開したのであった。それによれば、ギリシャ哲学は人間理性の普遍的次元では偉大な

寄与をなしたのではあるが、しかしこれらの理性的真理は、キリスト教によってのみ得られる神の啓示によって完成され、充足されることを必要とする、ということになる。教会の外に最終的な救いはない、と教えたこのカトリック教会とちょうど同じく、『法華経』も法華(蓮華)の教えの外には最終的な救いはない、としているように思われる。

ここで解決すべき中心的な課題は、究極の法華(蓮華)の教え(「妙法」)は、サンスクリット語や中国語として保存されている『法華経』とまったく同一であるといつてよいかどうか、あるいは前者は後者を超えたものではないのかということである。同じ意味で、ローマ・カトリック教徒は、神による救いがカトリック教会に限られるのかそうでないか決定すべきであるし、イスラム教徒は、救いがアラビア語の「コーラン」に帰依する人々にのみ限られるのかどうか決定すべきである。これは二十一世紀にとって主要な問題といえ、『法華経』の信奉者がこの多元主義という課題をどのように扱うかということが、将来『法華経』がはたすべき役割を大きく左右す

ることになる。

これまで『法華経』における「saddharma」(真なる教え、「妙法」)は、他の対抗する、より劣った教えに対する法華の優位を論じるさいの論争的な用語として、しばしば使われてきた。同じく、『法華経』の中では、「方便」という言葉は他のすべての教えに關していわれるのであるが、そこでは法華(蓮華)の教えは除外されている。

こうした観点からは、将来存立しうる唯一の宗教的平和とは、すべての他の宗教にとっては、それらの教えを棄て、法華の信徒の集まりへ加わることだということになってこよう。この態度は「寛容な勝利主義」と呼ばれることができる。というのは、限られた役割をもった他の諸宗教に寛容ではあるが、しかし究極なものは法華であるとするからである。たとえば、他の真理の諸形態が衰える時という、「衰退の時代(末世)」についての『法華経』における言及はすべて、法華(蓮華)の教えの持続的な力、救済の力、そして勝利を明言しているのである。⁽⁵⁾

『法華経』を読誦し、受持し、解説する者に対する多くの賞讃の詩頌にもかかわらず、世界的な多元主義とい

う流れの中で、『法華経』が次の千年間において自らの約束を果たすべきであるならば、『法華経』について何らかの新しい解釈が必要になってこよう。たとえば『法華経』が、多くの人々にとって救いであり、多大の利益をもたらし、そして究極的なものであったとしても、はたしてこれらの実例だけをもって、あらゆる時、あらゆる場所、あらゆる人々にとって『法華経』があまねく究極的なものになるといつてよいであろうか。私は、『法華経』という書かれた文書(the written Text)と、その中でほ

め讃えられる法華(蓮華)の教え(the Lotus sermon)との間には区別ができるし、区別しなければならぬということを論じたい。『法華経』は、法華(蓮華)の教えは究極の救済的真理を含んでいるというが、その教えは『法華経』の文には記載されてはいないのである。經典はわれわれに法華(蓮華)の教えの内容について告げる文書であるが、經典と教えの内容とを同一視することはできない。書かれた文書の中でほめ讃えられる救済の真理は、実際には、この書かれた文書を超え、唱えられた言葉を超え、そして持ち、読み、書き、あるいはそれを

十分に表現するわれわれの能力を超えているのであり、たとえわれわれがこの救済の真理へ、書かれた言葉によって接近するにしてもそうであるということを、私は主張したいのである。

文書としての「法華」と永遠の法華（蓮華）の教えとの間の区別は、月を示す指と示された月との間の区別と同じである。指は救いにとって大切で必要であるかもしれないが、月こそが経験される実在であり、救いの真理の根源である。この区別にもとづくならば、文書としての『法華経』の効能（方便）は、それによって生命が救われた人々によって、またそれを通して究極的なものを経験した人々によって賞讃される。しかしながら、他の人々は悟達のための別の仕方を見つけ、すぐれた法華（蓮華）の教え（妙法）の中に示されているものと同じ実在によって救われるかもしれない、という可能性があることになる。

この区別を支持するとともに、「方便」についてのこの『法華経』の教えを、『法華経』というこの文書そのものへと適用することを私は提案したい。すると、『法

華経』は「妙法」を示すに巧みであり、人々の精神の成長に役立つという理由によって、『法華経』は現在の形態で大切にされるべきであるということになる。しかし、真理を伝えるものだからという理由から、この文書そのものを崇め奉るならば、それが指示する真理とはちがって、この文書は作られたものであり、不完全で条件付けられ、不朽のものではないことも理解すべきだということとなる。

經典の主な役割は、救いの真理のための乗り物であることによって、存在者を究極の救済へともたらすことである。彼らに救いの真理をもたらす唯一の役割をもっているということから、『法華経』という文書を崇拜する者がいたとしても、このことから、三つの乗り物が「妙法」という偉大な一つの乗り物によって廃止され消え去るような「方便」とはならないのではないか。

エティエンヌ・ラモットは次のように指摘している。もともと条件付けられたものに関するブッダの教えが、もしも不朽なもの（paramattha・勝義）と考えられたとしても、どのように教えられ、学ばれ、そして人々に信奉

されるかは、条件付けられた変化の世界（saṃvṛti・世俗）に関わることである。したがって、早くから仏教思想において、仏教それ自体が衰退し消滅する未来の時である「末法」という考えを展開したことは驚くべきことではない、と。たとえ、法華（蓮華）の教えに説かれた真理が永遠の真理であり、時代から時代へと再び現れるものだと信じるとしても、サンスクリット語、中国語、英語またフランス語で書かれ唱えられるテキストの形態は有限であり、変化するものであり、いつかは消えてなくなるものである。

ある特定の文書を聖なるものとして崇敬しがちな人間の傾向性の現れとして、『法華経』を人類の宗教史においてみるならば、法華実践者ないし信仰者の役割がたいへん重要なものとなってくるということがいえよう。聖典は聖典として生みだされるのではなく、人間の生活上の役割から、また人間の応答によって生みだされるのである。歴史的状況でいえば、聖典が生まれるのは、その真理が外部に妥当するものをつからではない。そうではなく、その真理は必然的に信仰者との相互作用において

生じるのである。その重要な意義は、隔離された点や抽象性にあるのではなく、ひたすらそれに応答し、それによって変化し、そしてそれを尊重するところの人々の生活の中にある。『法華経』が至上のものであることを見いだすのは人々であって、テキストにそう書いてあるからではない。つまり、いかに、そしてどんな点で聖典が究極的なものであるかを決定すべきなのは、民衆なのである。

法華経は多くの党派的なメッセージに満ちている。すなわち、法華伝道者を賞讃し、迫害に耐えた者には多くの褒賞を約束するが、他方、法華の教えを拒絶する者には山盛りほどのいやな脅かしがある。しかしながら、救いの真理（妙法）とその乗り物（文書としての『法華経』）という区別によって、法華信仰者および伝道者は他の宗教の信仰者となる共通の場を発見できるかもしれない。他宗教の信仰者たちは『法華経』という文書は知らないかもしれないが、それによって運ばれる不朽の真理（妙法）は信奉しているかもしれないからである。

『法華経』が救済と調和のメッセージを二十一世紀へ

と提出しうるために、私は次のことを提案したい。それは、『法華経』は限りなく異なる諸宗教の形態を「方便」(文書としての『法華経』を含む)として認めているとともに、すべての形態を超える、救いであり永遠であるところの普遍的真理(「妙法」)の存在をも認めているものとみられる、ということである。信仰者にとっては、文書としてある、そして唱えるところの『法華経』は、なんといいっても救いであり、究極的なものであり、かつまた一乗の唯一の表現であろう。しかし、『法華経』という文書によって接近される「妙法」はそれには限られないのであり、他の「方便」によっても可能であろう。ここに述べた解釈は、世界に広がっている宗教的な相違を顧慮しつつも、宗教の最高価値を肯定するための積極的基礎を提供するものであり、これは「法華(蓮華)」における巧みな方便と永遠性という、鍵ともいべき考えに基づいたものである。

『法華経』におけるさまざまな菩薩は、来たる世紀において跡を継ぐべき実践的な例としてみられるのではないだろうか。天台智顗(五三八―五九七)は『法華経』の

なかに多くの重要な哲学的、瞑想的真理を発見したのであるが、三階教の宗祖である信行(五四〇―五九四)は社会福祉プログラムのなかでその教えを実行した。常不輕菩薩のように、彼はけつして他人を蔑みはせず、未来のブッダとして彼らを称賛した。「法華」信仰者は他宗教のメンバーをこのように扱えるのではないだろうか。さらに、来たる世紀の新たな問題は、多くの革新的な解決法を要求するだろう。「法華」信仰者は、観音菩薩のように、他の人々を手助けするために、多くの新しいそして異なった形態を受け入れることができるのではないか。たとえそれらの形態が、他宗教とか他の聖典という衣装を着ていたとしてもである。

信仰をもっている人だけが『法華経』を理解しうるということは事実かもしれない。だが、もし「法華」信仰者たちが二十一世紀の世界に積極的な影響を与えることができるならば、すべての人々が『法華経』の重要性を理解し、高く評価することができるようだろう。したがって次に、二十一世紀に直面する、より緊急な三つの難問を概説し、これらの領域における菩薩行の実践によって法

華の真理を示すように、法華信仰者に促したいと思う。

二、地球という挑戦

万国宗教会議百年祭のためにジェラルド・O・バーニーは『地球二千年再訪―われわれは何をすべきか―』と題した本を出版した。そこで彼が念入りに述べたことは、人口超過、自然資源の減少、そして新しい形の貧困・暴力・憎しみ・絶望がいかに地球の生命を脅かしているかということであった。彼は、回復へのプロセスを始めるためには、「その最初の条件として、支持できる、正しい、そして健全な地球との関わりを必要とする」と述べている。ところで『法華経』は、この地球との大切な関わりをどのように養成していくのか。

『法華経』は、カール・ヤスパースが宗教の軸の時代と呼んだ時代の所産である。軸の時代には世界の主要な宗教のほとんどが形成されている。元来、この軸の時代にはプラトンや孔子というような偉大な思想家たちが現れただけでなく、ゾロアスター教、仏教、キリスト教、道教、そしてタルムード時代のユダヤ教などがその基礎

を据えた時代であった。これらの宗教の特徴とは、大地や空と親密な関係をもっていたそれまでの地方文化から脱却するという、歴史的動向として生じた点にある。地方的なものとは対照的に、社会関係あるいは内面的な思想や態度に焦点を当てたこれらの新しい啓示は、大地や空や動物たちとは結びつかなかった。こうした地方的環境との親密さから離れたことにより、これら新しい宗教はより広く運用しうることとなり、拡大が可能になったのである。

この軸の時代のモデルにしたがったさまざまな世界宗教は、今日、自然からの分離というものが、いかに固有の文化によって育まれた自然の全体性の喪失を意味してきたかということを理解しはじめている。北アメリカのインディアンたちが、どんなふうに諸国家が代表を派遣しているのかを調べに国連を訪れたとき、彼らは「ところで、いったい誰が動物や鳥の代表なのか？」と尋ねたといわれる。現代社会は自然の価値をみそこなったが、他方、原住民たちはつねに自然を大切にしてきたのである。アメリカインディアンの首長であるシアトルは、一

八八五年にピアス大統領が彼の土地を買いいたいといってきたとき、つぎのように述べたと伝えられている。

「あなた方はどんな具合に空を——この大地の暖かさを買ったり売ったりできるというのか。そんな考えはわれわれには不可解だ。今なお空気のさわやかさや水の泡立ちはわれわれのものではない。それなのにどうして、あなた方がわれわれからそれを買うことができるのか。この大地のすべてはわが民には聖なるものです。きらめくすべての松の葉、すべての砂地の海岸、すべての澄んだ清らかな音色をたてる虫たちは、わが民の思い出や経験のなかで神聖なものなのです」。

現代日本に関する最近の研究のなかでも、高齢の人々にとつての自然の重要さという注目すべき発見がなされている。高齢者たちが、彼らが死ぬときどんな景色をみ、音を聞き、匂いをかぎたいか尋ねられたとき、彼らはつねに、木々や自然の景色、新鮮な空気の香り、そして鳥や風の音をもっとも高く評価したのである。⁽⁹⁾この雑誌のたいていの読者や、『法華経』を信じる多くの人も、お

そらく社会的問題に心を奪われていて自然を顧みないことがあるのではないか。しかしながら、人間に死が近づくと、人生においてもっとも重要なものが鮮明となり、大地と大気が第一のものであることが明らかにする。したがって、自然を保護し育成することは、われわれの住む惑星の健康にとつて重要であるだけでなく、われわれ自身の精神的成長にとつても同じく重要なことなのである。

世界の主要なすべての聖典の中でも、『法華経』は、花の名前を冠したものととして、また自然への数多い引用のゆえに際だっている。『法華経』は二十一世紀において、われわれが自然との親密さを取り戻すために、大きな意義をもつ可能性をもっていると私は考えたい。『法華経』には、われわれの自然との回復を示唆するに十分な比喩の表現があることはたしかである。だが、これが実現されるか否かは、『法華経』がその信仰者によつていかに解釈されるかにかかっているといえよう。

三、経済という挑戦

神殿でさえある。五十年前、ショッピング街は、労働を象徴するものとして、休日にはしばしば閉じられていたのだが、現在では、発展するアメリカのコミュニティ・ライフのセンターとして、休日にこそもっとも活動的な場となっている。

自然との親密さにとつての最大の敵は、消費主義というこの貪欲さである。この結果、北半球ではそのエゴを満足させるためにあまりにも多くを浪費し、他方、急速に発展する南半球の人口は、生き残るためにますます多くを消費する必要があることになる。「南半球の人たちが現在の北半球の人たちと同じ生活をするためには、地球上の全経済活動が五対十の率で増加する必要がある⁽¹⁰⁾」。資本主義は、その自由市場システムの経済モデルによつて世界的優位を勝ち取ったのだが、それがとりもなおさず、この増大した生産と消費とが地球にとつての災難にほかならなかったとは、なんと皮肉なことだろうか。

地球は、いまや国連によつても、各国の政府によつても、軍事協定によつても統制されてはおらず、国際的商業と「貿易と関税に関する一般協定(GATT)」によつて統制されているのである。いまや人々の価値は、国家的・文化的・宗教的価値よりも経済的表現でもって、より多く計量されている。アメリカのショッピング街はいまや市場というより、避難、蘇生、そして休養の新しい

経済生活について『法華経』は何を語りうるか。おそらくこの領域は仏教や『法華経』にとつては最大の弱点の領域であろう。だが二十一世紀の争いを支配するのはこの領域である。過去のヨーロッパでは、神聖ローマ帝国が崩壊する一六四八年までは、宗教戦争が生活を支配していた。ウエストファリア講和条約がカトリックとプロテスタントの間の三十年戦争を終わらせ、国際機構の国民—国家体制が生まれた。一六四八年以後は、国家同士の争いが戦争と平和を支配したし、国家への忠誠は、人々を死へ追いやりたり他人を殺すことへと鼓舞することができたのである。しかしながら一九四五年以降、そして国連の創設以降は、紛争に影響を与える主要な要因は経済摩擦になったのであり、このもっとも鮮やかな例は、共産主義と資本主義の間の冷戦にみられたところであ

る。資本主義が今日一般の世界経済体制ではあるが、依然として経済問題から地域戦争が生じている。

『法華経』にはいくつかの選択肢が用意されている。――困窮した息子はひそかに彼の父親によって雇われるが、この雇用は消費や生産を増大させるためではなく、個人的・社会的、そして精神的なさまざまな美德を成就させるためである。――友人によって衣の裏側に隠された宝珠は、彼の仏性、悟りの可能性の象徴である。ここでは富は否定されないが、より高い価値の下におかれている。――化城は、最高の成就でなく、涅槃のより低いレベルのための象徴となる。――喜見菩薩は仏陀への供養として自身の身体を焼くことで、薬王菩薩になる。つまり最終的に価値あるものは富や身体でなく、永遠のブッダであり、他者への菩薩の奉仕である。

四、グローバルな倫理

一九九三年万国宗教会議の最終日の総会の中で、九月四日シカゴで厳粛に宣言が読み上げられたが、それは包括的に問題を総括したものであり、グローバルな倫理へ

向かって作業していくことを出席者に促すものであった。それから各委員が趣意書にサインしたが、それはつぎのような内容のものであった。

われわれは、グローバルな倫理ということで、包括的なイデオロギーや、あるいはすべての現存する宗教を超えた画一的な統一された宗教を意味するものではないし、他のすべての宗教の上に一つの宗教の支配をおくことではまったくくない。グローバルな倫理によって意味するものは、諸価値、変更不能な諸基準、そして個人的なさまざまな態度は結合することができるといふ基本的合意である。このような倫理への基本的合意なしでは、遅かれ早かれすべての共同体は、無秩序あるいは専制主義によって脅かされ、諸個人は希望をなくすことになる⁽¹⁾。

グローバルな倫理への探究はヨーロッパの神学者であるハンス・キュンクによって提唱されたのであるが、彼はこういつている。

「宗教間に平和なくして世界の平和はない。宗教間に対話なくして宗教間の平和はない」。

『法華経』が、積極的に他宗教にかかりあい、一乗における最終的統一へと向かっていることはたしかである。しかしながら『法華経』信仰者はつぎのことを肯定できるのではないか。つまり、他の宗教の人々に現存している価値を、さしあたりは従属的ではあるが有効な道（「方便」）として、来世紀あるいは来たる千年間にわたって肯定できるのではないか。たとえこの道が「法華」信仰者にとっては救済の真理をもっていないとしてもである。第二に、「法華」実践者は、同じくつぎの考えも受け入れられよう。つまり、全人類のための最小限の倫理的基準への参加に基づいて、苦楽を共にする人間共同体を作り出すことによって、人間の、そして生態学的な悲惨を避ける方法を見いだすことが重要であるという考えを、である。

結論的考察

来たるべき世紀における『法華経』の意義という問題は、けっして抽象的な問題ではない。それはビジョンと決断と、そして『法華経』の信仰者である人々の作業を

必要としている。というのは、『法華経』が新時代の夜明けにとつて生命を導くものとなるためには、それはわれわれの世界にとつて「暗闇に輝く光」にならなければならぬからである。たしかに、あらゆる時代の人間に共通の、病氣・老化・死というような永久にわたるさまざまな暗闇があり、それらは『法華経』が軽減しつづけるだろう。だが、それぞれの歴史的時代にはそれぞれの特殊な問題もある。すでに、これらの問題のどれが二十一世紀にとつて重要なものであるかは明らかなくともである。すなわち、宗教的多元主義、環境、経済、そしてグローバルな倫理の必要という問題である。法華経の信仰者たちが、これらの課題に目下どのように応えていくかということが、将来の『法華経』の意義を計るバロメーターになりうると思われる。

原注

(1) Burnouf, Eugene, tr., *Le Lotus de la Bonne Loi* (Paris: Imprimerie Nationale, 1852), 897 pp.

(2) Kern, Hendrik, tr., *Saddharma-Pundarika or The Lotus of the True Law* (Oxford: Clarendon, 1884), 454

